2. 幼児は学習が大好き

飽きすに続ける反復練習

「教育とは、親のわが子に対する本能的な営みである」と私は言いました。つまり、親の立場から行うものが“教育”であって、これを子供の立場から言いますと“学習”ということになると思います。“学習”という言葉は“勉強”という言葉と同じ意味のように使われていますが、これほど違ったものはありません。子供は“学習”が大好きですが“勉強”は大嫌いです。この“学習”と“勉強”の違いをよく明らかにしておく必要があると思います。

“学習”という言葉は、孔子の『学んで時にこれを習う』に由来するもので、二千年に亘る由緒の深い言葉です。“学”はわが国では“まなぶ”と読みますが、これは古くは“まねぶ”と言い、今の“まね（真似）る”ことを意味した言葉です。

立派な人の言行に触れて「ああすばらしいなあ」と思い、「自分もあのようになりたい」と願い、その言行をまねることが“まなぶ”ということの本義です。それは、言わば人間の本能と言うべきものであって、だから、それが最も純粋に発揮されているのが幼児だと思います。

幼児は、大人の言うこと、なすことを実によく捉え、実に見事にまねます。そして、それを飽きずに繰返して、止めることをしません。これが「学んでこれを習う」の“習う”ことなのです。

“ならう”とは“な（慣）る”という古語の延びたもので、それは今の“慣れる”という言葉と同系の言葉です。『習うよりも慣れろ』という諺がありますが、実は、習うことは、元来“慣れる”ことを意味した言葉であって、だから“習慣”という熟語があるわけです。

コラム　**豆知識**

聞くと聴く

聴の正字体は聽で、その“悳”は「直」と「心」との会意形声字である。“真っ直ぐな心”という意味の字であるから、聴は“心を真っ直ぐにして聞く”こと。聞は「門」の間に「耳」を入れ、門の間からきこえてくる物音や声に耳を澄ませて“きく”こと。つまり“聞く”は、単に耳の働きとしての“きく”で、“聴く”は真剣に聴こうとして“きく”、“注意してきく”こと。

同じことを繰返し繰返しやっていますと、それに慣れて、難しいことも易しく出来るようになり、努力しないでもうまく出来るようになります。それを“習う”というのですが、幼児の生活を見ていますと、実際、同じことを繰返しても決して飽きることのないことが解ります。

大人の目から見ると、実に単純なつまらないと思われるようなことを、いつまでも繰返し繰返し反復して、一向に止める気配がないのをよく見ることがあると思います。そのように反復練習するので、それが身に付いてまるでそれが本性であるかのようになるのです。

「習い性となる」とか、「習慣は第二の天性である」とか言われているゆえんです。

幼児は、このように、まねること（学ぶ）と、繰返すこと（習う）とが実に好きなように生れついているのですから、幼児はだれでも生れつき“学習好き”だということが出来ます。それで「好きこそ物の上手なれ」というわけで、自然と物事に上達し、能力が養われるのです。

コラム　**豆知識**

学習と勉強の違い

卵からかえった雛鳥が、親の羽ばたきを見て羽ばたきするのが「学」だが、それだけでは飛べるようにならない。それを何十回、何百回と繰返すことで飛べるようになるのだ。「習」は“羽ばたきを百回繰返す”意味で、羽と白（昔の百の字）とを組合せて作った字。

雛鳥は、まねる（学）こととそれを繰返す（習）ことによって、それまで出来なかったことが出来るようになるが、これは人間も同じだ。出来なかったことが出来るようになると大きな喜びを感じる。それを孔子は「学びで時にこれを習う、また喜ばしからずや」と言った。